

新聞英語の読解過程とスキーマ

鈴木賢司*

Reading Newspaper English with the Help of Schemas

Kenji SUZUKI

要 旨

新聞英語は豊富な話題性のために、その読解の事前あるいは初期の指導において、各話題に応じて内容スキーマを日本語で与えることは読解には極めて有効と考えられる。新聞英語の特徴はニュースの概要を説明する「見出し」の存在であるが、本稿では学生の提出したレポートを分析することにより、見出しの読解に内容スキーマの提示がどの程度有効であるかを考察した。その結果、新聞英語の見出しは、内容スキーマと構造スキーマが密接に関連していることが多く、その場合には、日本語による内容スキーマの事前あるいは初期段階での提示のみでは、読み手の正確な読解活動にスキーマが有効に機能しないことがわかった。豊富な話題を扱う新聞英語の読解指導を行う場合には、日本語による内容スキーマの提示と同時に、その内容スキーマが英文の構造スキーマにどのように反映されるかという指導を伴う必要がある。

キーワード：英語教育，読解過程，スキーマ理論，新聞英語

1. 問題の所在

第2言語学習者がテキストを読解する過程では、スキーマの欠如または不活性が、テキストの内容理解に困難さを生じさせる原因となる、といういわゆる「スキーマ理論」は、津田塾大学言語文化研究所のグループ、およびその他の研究によって、すでに実験、検証されている¹⁾。すなわち、テキストの読解過程では内容語の意味を与えることは、学生が文章を理解する上では、ほとんど影響がない。テキストの内容を正しく読み取る上で大きな力になるのは、日本語で適正なスキーマを与えることである。読解過程の初期の段階で、そのテキストに関わる文化

*講師 英語教育

的背景をヒントとして与えることが有効な手助けになるのである。

このようなスキーマ理論は、特に新聞英語を教材として用いる場合、きわめて有効と考えられる。それは他の英語テキストとは異なり、新聞英語の特徴がその話題の豊富さにあるからである²。例えば、代表的な日本の英字新聞である The Japan Times の最近の記事³を概観しても、大きな記事だけでも以下のようにさまざまな分野に及ぶ見出しが見られる。

- ・ Crisis talks under way in Egypt (国際政治)
- ・ Nobel Prize to help peace efforts, says Kim Dae Jung (文化)
- ・ Sun be turning heat up on Earth by deflecting cosmic rays that cool (科学)
- ・ U.S. murder rate hits 33-year low, FBI reports (外国の社会問題)
- ・ Hingis tops Davenport for rare win at home (スポーツ)

また、高等学校の英語教育においても、時事英語の内容に関しては「題材としては、英語が話されている国に関するものから、全世界、地球規模のもの、ニュース、天気予報から料理、ドラマなどまで多様な話題にわたる。(中略)この科目の内容が日常生活、社会生活、風俗習慣などを含む外国の文化、地理・歴史、政治・経済などの外国事情及び科学などを扱うことから、地理歴史科、公民科をはじめ他の教科の内容と深く関連することもある(以下略)」という説明がなされている⁴。このように豊富な話題を時事英語が提供するということは、新聞英語のテキストの読解には話題の数と同じだけのスキーマが必要となることを意味している。読み手がテキストの話題に応じてそれぞれのスキーマを活性化させることが、新聞英語の読解には有効なはずであり、読解過程の初期にテキストに関する内容スキーマを日本語で与えることが、新聞英語の読解指導に要請されるのである。

それでは、日本語でスキーマを与えることは、新聞英語の読解過程に無条件に有効なのであろうか。新聞英語の特徴は「見出し」の存在である。見出しが「本文を要約し、読者にニュースの全体像と、それがどの分野(スポーツ、経済、外国のニュースなど)に属するかについての情報を与え」、それをざっと読めば「その日のニュースの概要をつかめる」⁵という役割を果たすのであれば、日本語でスキーマを与えることは、この見出しの読解にも非常に有効であると考えられる。

本稿では、時事英語の代表である新聞英語を理解するために、日本語によるスキーマの提示がどの程度有効であるかを、見出しの理解という面に限定して考察する。学生(本学で筆者の担当する英語学演習受講者)が予めレポートの準備ができ、必ず日本の各英字新聞で扱われると予想された2000年6月の南北朝鮮サミットについての新聞記事に用いられる見出しの読解を研究対象とした。

2. 南北朝鮮サミットのスキーマ

筆者の担当する英語学演習を受講している学生が与えられたレポートの課題は以下の通りである。

「2000年6月13日からの朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国のトップ会談を報じた英字新聞の記事を読んでその記事の見出しを書き写し、それぞれに日本語訳を付ける（何新聞かを明記する）。A4レポート用紙2枚程度にまとめる。

学生は、20から30程度の数の見出しを抜き出すことが予想された。

レポートを課すに当たって学生に提示した日本語による背景知識は、南北朝鮮サミットについての新聞記事を理解する要になると考えられる朝鮮半島分断の歴史の概要で、以下がその要旨である⁶。

「1945年の日本の降伏後、朝鮮半島をほぼ二分して横切る北緯38度線を境に、その北側の地域にはソ連軍が、その南側には米軍が進駐し、それぞれ別個の体制が敷かれた。その後、それぞれの地域に朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国が成立し、双方は対立が続いた。米ソ両軍の撤退後の1950年6月、朝鮮戦争が勃発し激しい戦闘が続いたが、1953年の休戦後は、およそ北緯38度線を境に南北の国家が対峙する状態が現在まで続いている。現在の北側の指導者はキムジョンイル（金正日）総書記、南はキムデジュン（金大中）大統領である。」

日本語によるこのような背景知識を与えた理由は、2000年6月の南北朝鮮サミットでは主たるテーマとして、必ず南北朝鮮の「統一」に関する何らかの議論がなされると予想されたため、学生には「朝鮮半島の分断スキーマ」を活用して、「朝鮮半島の統一」に関する議論についてのスキーマを活性化することが期待されるからである。

それでは、このようなレポート課題に対して事前に日本語による背景知識を与えられた学生は、英字新聞の見出しをどの程度正確に理解したであろうか。

3. 英字新聞の見出しの理解度

英語学演習を受講している学生が提出したレポートは全部で59部、使用した英字新聞はThe Japan Times, Asahi Evening News, The Daily Yomiuri, Mainichi Daily Newsなどであった。以下、与えられたスキーマと英字新聞の見出しの理解という観点から、レポートを分析する。見出しに表れた英文を文法的に分類して項目を立てた。各英文見出しの次の数字は、その見出しをレポートに取り上げた学生の数、括弧内は正答及び誤答⁷の数である。誤答例に関しては、

誤答が多数ある場合は、その項目に対する誤答の中で代表的なものを挙げた。

(I) 固有名詞の複数形を含む見出し

a. Korea's Kims set to meet after delay (The Japan Times) 39 (正 20・誤 19)

(南北両首脳は延期の後、会談に着手)

誤答例 朝鮮の金(正日)氏は遅らせたのち会うことを決める。

韓国の金大中(大統領)が会うことを決めたが延期となった。

金大中は1日延期の後会う準備をする。

金正日総書記率いる北朝鮮側が予定の会談日を延期。

与えられたスキーマから南北朝鮮の首脳会談には、キムデジュン大統領とキムジョンイル総書記という2人の「キム」が登場することが推測される。サミット会談の場面のように、この2人に同時に言及する必要がある場合には、固有名詞ではあっても Kim → Kims という複数化が生じることが予想される。したがって、この Kims は南北両首脳のことを一語で述べているので、「南北両首脳」あるいは「両キム氏」と訳出すべきであるが、誤答例に見られるように、この Kims を単数として解釈する答が多かった。その結果、主語の Korea's Kims は、Korea も一国と考えるため「朝鮮の金(正日)氏」あるいは「韓国の金大中(大統領)」のように一国の指導者のみを表す訳となっているのである。

b. 2 Kims meet in Pyongyang (The Daily Yomiuri) 16 (正 12・誤 4)

(南北両キム氏平壤にて会談)

誤答例 金正日平壤で会談する。

この見出しも a と同様に Kims という固有名詞の複数形を含んでいるが、誤答の割合は a が正誤ほぼ半々であるのに対して、非常に低い。これは、主語の Kims を限定している“2”が次に複数形が続くことを明示しているので、学生は自然に Kims が「2人のキム」つまり南北両首脳のことであると解釈するためと考えられる。複数形の固有名詞であっても、そのことに気づかせる修飾語句があれば、学生はその複数形の表す内容を的確に把握できるのである。

c. Two Kims set to ink key agreement (The Japan Times) 35 (正 28・誤 7)

(南北両首脳重要な協定に署名)

誤答例 2人のうちの1人キム氏が協定の解決のカギに署名することにとりかかる。

これも b と同様に“Two”が次に複数形が続くことを明示しているので、誤答はかなり少数である。この見出しの場合は、「解決のカギに署名する」という誤答例にも見られるように、むしろ「名詞の形容詞への転用」を理解することが困難であったと考えられる例が多い(2)

参照)。d. 2 Koreas to sign agreement (The Daily Yomiuri) 6 (正6・誤0)

(南北朝鮮共同宣言に署名)

人名ではなく国名が複数形になっている見出しであるが、これも“2”が次に複数形が続くことを明示しているので、学生は自然にKoreasが「南北朝鮮」のことであると理解できるため、誤答が全くなかったと考えられる。

e. 2 Koreas sign historic pact (The Daily Yomiuri) 7 (正7・誤0)

(南北朝鮮, 歴史的な協定に調印)

この見出しもdと同じ“2 Koreas”なので、誤答は全く見られなかった。

f. Koreas seek unification (The Japan Times) 42 (正25・誤17)

(南北朝鮮, 統一を模索)

誤答例 朝鮮(韓国)は統一を求める。

朝鮮の人は統一してくれるのを希望。

誤答例が示すようにKoreasを「朝鮮」「韓国」といった一国で訳している誤答例が多い。この見出しでは、d, eと同じくKoreaが複数形で用いられているが、複数形が続くことを明示する“2”がないので、学生は「Koreas → (南北) 2カ国」という意識が生まれなかったためであると考えられる。それでも、正答が誤答を上回ったのは、unification(統一)という語には「複数のものの統一」という含蓄があるため、逆に、「統一」→「Koreasは『南北朝鮮』」という意識を導いたと考えられる。

g. Koreas make small gestures (The Japan Times) 19 (正8・誤11)

(南北朝鮮, 小さな意思表示)

誤答例 (北)朝鮮はささやかなそぶりを示した。

韓国はささやかな意思表示をした。

これもfと同様に“2”が修飾しないKoreasが主語であるが、fがunificationという語を含んでいるのと異なり、述部の部分に主語が複数であることを前提とする表現を含まない。その結果、誤答例が示すように主語の複数形を無視した答が多く、誤答が正答を上回った。

(2) 名詞の形容詞への転用を含む見出し

a. N. Korea fills streets for landmark visit (The Japan Times) 38 (正9・誤29)

(北朝鮮の人々は、歴史的な訪問を見に通りに溢れる)

誤答例 北朝鮮は名所訪問のために街路を書き込む。

金大中が降り立つ場所へ行くために北朝鮮は道をいっぱいにした。

北朝鮮は訪問の日印で通りを満たしている。

N. 韓国はランドマーク（境界線）を訪れるための通りを占める。

北朝鮮は国家注目の訪問道に人があふれている。

朝鮮は画期的な出来事の訪れのために街路を埋めつくす。

北朝鮮は旅の日印として道路が一杯になる。

名詞（句）が形容詞的に使われるのは、時事英語に特徴的な語法・文法である⁸。特に、使われた名詞が学生に名詞として定着している場合、あるいは辞書がその語を名詞としてしか扱っていない場合には、学生はその語を次の名詞を形容するものとして捉えるのに困難を感じると思われる。この見出しに含まれる landmark は、辞書では「陸標、目印」「(土地の) 境界線」「画期的な事件」などの名詞の定義が与えられているが⁹、ここでは次の visit を修飾して「画期的（歴史的）な訪問」という意味になるように形容詞化している。しかし、「名所訪問」「降り立つ場所へ行く」「ランドマーク（境界線）を訪れる」「画期的な出来事の訪れ」などの誤答例が示すように、非常に多くの学生は、landmark が visit を形容していることが把握できなかったと考えられる。その結果、visit に想定される行為者を「北朝鮮の人々」と捉えた学生も少なくなかったのである。

b. Two Kims set to ink key agreement (The Japan Times) 35 (正 19・誤 16)

(南北両首脳重要な協定に署名)

誤答例 2人の金指導者が契約する鍵に署名することを定める。

2人のキムは、同意のかぎ（賛成のかぎ、解決のかぎ）を署名することを始めた。

2人のキムは、サミットでの協定のかぎに色をつけるべく、本腰を入れて取りかかった。

aと同様、この見出しにも key という名詞で用いられることが多い語が、次の agreement を形容している例が含まれている。誤答例にある「鍵に署名する」というのは、このような名詞の形容詞への転用が理解されなかったためと考えられるが、key は、例えば「キーワード」のように、日本語でも形容詞として使われることが多いので、誤答の割合は a に比較して少ないと言える。

(3) 中学英語の基本表現を含む見出し

Korea summit revives hopes 50 years old (The Japan Times) 23 (正 14・誤 9)

(南北会談は半世紀の夢を復活させた)

誤答例 朝鮮サミットの復活は50歳を望む。

韓国サミットは50歳台の人の望みを回復させた。

韓国の会合は50歳に生き返らせるのを願う。

南北サミット50代の希望を蘇らせる。

南北首脳会議は50年前に戻るだろう。

学生は、事前に与えられた背景知識から「1945年の日本の降伏後、朝鮮半島では北緯38度線を境に南北2つの国家が成立し、朝鮮戦争を経て現在まで分断国家という状態が続いている」という朝鮮半島の現状を理解していると考えられた。したがって、*hopes 50 years old*が現在に至るまでの「50年来の夢」である南北朝鮮の統一のことを言っていると予想できると思われたが、誤答例に示されるように、*50 years old*が「年齢」を表し「(人が)50歳である」と解釈する学生が多かった。〈数詞+ years old〉は中学校の初級段階での学習項目で、学生には充分定着していると考えられるが、それが「人」ではなく *hopes* を形容する文脈となると、事前にスキーマを与えられていても、正確に解釈できなかったと思われる。

(4) その他

4 Pacific powers favor summit (The Daily Yomiuri) 4 (正1・誤3)

(太平洋地域の強国である4カ国は南北首脳会談に好意を示す)

誤答例 4つの太平洋の権限をサミットで支持。

4カ国の力が会議を活気づけた。

サミットでは4つの和解の条件が記章された。

この見出しでは、名詞の *power* が抽象名詞ではなく「強国」を意味する普通名詞として使われている。「4」という数詞や *Pacific* という地域を表す形容詞が修飾し、*powers* が複数形であることから、この語が「力」の意味で用いられているのではないということが予想できるが、この見出しを正確に理解できた例は少ない。

4. 誤答分析

学生が南北首脳会談に関する英字新聞を読解するために、事前に日本語で背景知識を与えられたにもかかわらず、見出しによっては多くの誤答が生じた理由を各項目毎に考察する。

(1) 固有名詞の複数形を含む見出し

見出しに含まれる *Kims, Koreas* という固有名詞の複数形を正確に理解できなかったことを

示す誤答は、a, f, g の見出しに多く、f, g は同じ複数形の *Koreas* を含んでいるにもかかわらず、g では誤答の数が正答の数を上回った。

b ~ e の見出しに関して誤答が少なかったことから、固有名詞の複数形という概念は、文脈が把握できれば決して理解が困難ではないということが予想される。すなわち、b ~ e の見出しに含まれる *Kims*, *Koreas* には数詞の *Two* あるいは“2”が修飾しているので、次にくる語が複数の概念を持っていることを、読み手は強制的に意識させられるのである。これに対して、a の見出しでは *Kims* を修飾する語は *Korea's* で、次に複数名詞が来る必然性がない。また、f, g の見出しでは *Koreas* が修飾語を伴わずにそのまま使用されている。つまり、固有名詞が複数形になっていることを意識させる語がその前後にないので、読み手は自然に固有名詞＝「一つのもの」と見なし、複数を示す *-s* を無視して読み進めたと考えられる。また、f の見出しのように *Koreas* という語とは離れていても、「複数のものの統一」という含蓄がある *unification* という語が使われていると、読み手は *Koreas* を「南北朝鮮」と結び付けられるために、正答数が誤答数を上回ったと考えられる。

(2) 名詞の形容詞への転用を含む見出し

a の名詞 *landmark* が *visit* を形容するのに使われている見出しの解釈では、正答9に対して誤答が29と、圧倒的に誤答が多かった。事前に読み手に与えられた日本語による背景知識が、読解のためのスキーマとしては、ほとんど機能しなかったと言える。誤答例から見る限り、読み手は名詞の *landmark* が *visit* を修飾しているとは予想できなかったようである。名詞（句）が形容詞的に使われるのは、確かに時事英語に特徴的な語法・文法であるが、日本語による背景知識からスキーマを活性化しても、今回のキムデジュン大統領の訪問は「画期的（歴史的）な（→訪問）」であると予想できたと思われる。しかし、誤答の数が圧倒的に多いことは、読み手には名詞（句）の形容詞化ということについての英語による読解訓練が必要であったことを示唆している。

名詞 *key* を含む b の見出しに関しても、同様のことが言える。読み手には *key* は名詞の「鍵」というイメージが強く、それがこの見出しの正確な解釈の障害になったと考えられるのである。

(3) 中学英語の基本表現を含む見出し

見出しに含まれる *hopes 50 years old* が正確に解釈できなかった読み手は、全体の半数以下であったが、誤答はほとんどが *50 years old* を「50歳」と考えたものであった。この表現は、

中学校以来、「人の年齢を表す」言い方として読み手に定着してきたと思われる。それが、この見出しでは「人」ではなく hopes を形容しているため、読み手の正確な解釈が妨げられたと考えられるのである。

(4) その他

4 Pacific powers favor summit の power が、普通名詞として「強国」を意味することは、読み手に事前に与えられた日本語による背景知識からは予想できない。スキーマという観点からは「朝鮮半島の分断スキーマ」よりも、より上位のスキーマと考えられる「国際関係スキーマ」を活性化させる必要があるが、この見出しでは powers を“4 Pacific”が修飾していることから、この語が「力」の意味ではないことが予想されたはずである。しかし、誤答例から推測すると、読み手には power = 「力」という固定観念が強く働き、この部分の正確な解釈を妨げたと考えられる。

5. 結 論

スキーマ理論を利用した読解指導には、英文の構造スキーマ (formal schema) と内容スキーマ (content schema) の両面からの指導が必要である¹⁰。時事英語の読解過程の初期に読み手に日本語で内容スキーマを与えることは、記事全体の予想活動 (Anticipating) になる見出しの読解にも非常に有効であると考えられた。しかしながら、固有名詞の複数形を含む見出しの読解において、その固有名詞の複数形が文脈を示唆するような修飾語を伴わずに単独で使用されている場合には、誤答数から判断して内容スキーマを与えてもあまり有効ではなかったと言える。また、名詞の形容詞への転用を含む見出しの読解に関しては、内容スキーマの提示は、誤答の割合から判断して、読み手に与えられた日本語による背景知識が、読解のためのスキーマとしては、ほとんど機能しなかったと言える。名詞 (句) の形容詞化という構造スキーマについて指導が必要であったと考えられるのである。また、〈数詞 + years old〉のように中学英語の基本表現を含む見出しについては、読み手に定着していた「年齢スキーマ」が、むしろ、正確な解釈の障害になったと思われる。

このように、英字新聞記事の読解では内容スキーマを事前に与えることだけでは、読み手の正確な読解活動には十分有効に機能しないと考えられる。それは、固有名詞の複数形や名詞の形容詞への転用といった時事英語に特徴的な構造スキーマの指導を伴っていなかったためである。時事英語の読解に有効な内容スキーマは、記事に使用されている英文の構造スキーマと密

接に関連しているので、内容スキーマのみの提示では、読み手が実際に英文記事の読解過程に入った場合、直ちに構造スキーマの活性化に困難を来す可能性が高いのである。したがって、豊富なテーマを提供する時事英語の読解指導では、日本語による内容スキーマの提示と同時に、そのスキーマが英文記事に含まれる表現にどのように反映されるか、という視点からの構造スキーマの指導も伴う必要があると考えられるのである。

注

- 1 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ編、『学習者中心の英語読解指導』、大修館 1992年。
- 2 磐崎弘貞、「時事英語とは」『英語教育』、大修館、1998年10月、10頁。
- 3 The Japan Times, 2000年10月17日。
- 4 文部省、『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』、平成11年12月。
- 5 Reah, Danuta, *The Language of Newspapers*, Routledge, 1998, pp. 13-4.
- 6 「世界ニュース歴史地図」、『現代用語の基礎知識』1991年版別冊付録、自由国民社、78-9頁を参照。
- 7 各項目に対応する日本語訳の部分のみを正答・誤答の対象とした。したがって、(1)cと(2)bとは同じ見出しであっても、対象とした部分が違うので正答・誤答の数は異なる。
- 8 浅野雅巳編, *World News Today 2000/spring*, 金星堂, 2000年, p. ix.
- 9 『ジーニアス英和辞典』第2版, 大修館, 1997年。
- 10 英語科教育実践講座刊行会『ECORA 英語科教育実践講座』第3巻, ニチブン, 1992年 42頁。